

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol. 5 左利き幸福論

“右”って説明できます？

辞書^{へんさん}編纂を描いた超地道・青春(?)映画『舟を編む』。主人公の答えは「西を向いた時、北にあたる方向が右」。ブラボ〜ッ！ ま、西と北が分からなかったらどうなるんかいな？ とちょっと思わなくはないが。。

東と西の違いが分からなかった小学生時代の筆者は、同様に右も左も分からなかった。「富士山があるのかな？」みたいな〜（沼津市出身）。

小学校の先生は平気で、「箸を持つ手が右、茶碗を持つ手が左」と教えた。

左利きである筆者の脳はここで完璧に左右を誤って記憶した。

後遺症は後年に続く。車を運転していたころは怖かった。助手席でナビしてもらって、「次の信号を右に」と言われた瞬間、パニック。助手席の人はもっとパニックに。

運悪くフランス滞在経験（車は右側通行）も相まって、交差点を右に曲がった時などは、堂々と右レーンに入って逆走してしまう……。

毎回「今日は私の最期かも」と思いながらハンドルを握っていた。そしてご心配なく。運転は潔くやめました。「ソレ、左利きとは関係ない」っ

て？ いやいやいや、大学の教授から筆者と同じ体験談を聞いた時、これは教育のせいだと確信しましたねっ！

1980年代、米国・南カリフォルニアで、「左利きのほうが右利きより早死にする」という発表があったとか……。

さすがにこの発表の裏には誤った統計があったようだが、世の中、右利きの人に便利につくられていて、左利きって、ストレスが溜まる——というのは本当だと思う。

例えばバイキング料理。バケツのような鍋に入ったスープをすくうお玉は右利き用にできているが故に左利きはスープをうまく注げない。四苦八苦して、やっと着席したら、隣の人は9割以上の確率で大抵は右利き。うまく左端に座れなければ、「肘が当たってすみませんねえ」と小さくなって食事を続けなければならなかったりするのだ。

が、悪いことだらけか、といえば、そんなこともない。

小さい頃の習字の時間、「ハネが逆になる！」と筆を持つ

手は右に矯正されたが、頑固と親の放任主義が幸いして、箸はかたくなに左で持ち続けた。故に、筆者は変則的左利きへと成長を遂げる。

初めて持つ物はやっぱり左、ラケットは両方、細かい字を書くのは右だけど、筆で色を塗るのは右、ハサミや包丁は刃が右利き用だから右で持つ。

で、消しゴムは左で、鉛筆は右だ。ある日、同僚がわざわざシャーペンを消しゴムに持ち替えているのを発見、「どうしてそんな面倒なことするの？」と驚いた（それに続く、優越感！）。

弁理士受験のときは、時間がなかったから、左手で箸を持ち、弁当を食いながら、右手で論文を書いていた。

ちなみにこれは今でもたまにやる。我ながら便利。



※ 撮影協力：デリリウムカフェ＋キョー（霞が関）

ラテン語の「左」は後に「不吉」な英語「sinister」となり、フランス語の gauche（左）は「不器用」の意味でもある。インドで左手は「不浄の手」だそうだし、日本では「左遷」とかいうし、およそ左は嫌われ者。

でも、左利きって、ちょっと反逆児っぽい気がしないでもない。で、なんだかちょっと誇らしい。